

《2012年9月 月例会報告》

【日 時】2012年9月26日（水）19：00～20：45（その後「ルン」～0：00頃）

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ】フットサルの育成と国際交流ードイツ・ジャパン・スポーツアカデミーを中心に

【話題提供者】山下則之（（社）日独スポーツアカデミー・ディレクター）

【参加者（会員）13名】阿部博一（日本サッカー史研究会）、牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）、奥山純一（web エンジニア）、金子正彦（会社員）、熊谷建志（会社員）、小池靖（ビバ！サッカー研究会）、崔暢亮（㈱インターリベット）、白髭隆幸（日本スポーツプレス協会）、徳田仁（（株）セリエ）、中塚義実（筑波大学附属高校）、本多克己（㈱シックス）、山下則之（独日スポーツアカデミーe.V.）

【参加者（未会員）1名】国島栄市（ビバ！サッカー研究会）

【報告書作成者】高田勝敏

注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

フットサルの育成と国際交流

ドイツ・ジャパン・スポーツアカデミーを中心に

山下則之（（社）日独スポーツアカデミー・ディレクター）

<目 次>

第Ⅰ部 フットサルの育成と国際交流ードイツ・ジャパン・スポーツアカデミーを中心に

1. プレゼンテーション：山下則之（（社）日独スポーツアカデミー・ディレクター）
2. ディスカッション①

第Ⅱ部 日韓親善フットサル

1. プレゼンテーション：徳田仁（（株）セリエ）
2. ディスカッション②

第 I 部 フットサルの育成と国際交流

ードイツ・ジャパン・スポーツアカデミーを中心にー

山下則之（（社）日独スポーツアカデミー・ディレクター）

<プレゼンテーション>

1. はじめに

ドイツ・ジャパンフットサルフェスティバルという名前で、今年の1月から6月まで予選リーグから決勝トーナメントまでを約6ヶ月間かけて実施してきた報告と、その中で若い人たちがヨーロッパのスポーツに触れて欲しいということで、ドイツ研修を参加者の中から何名か現地に連れていきました。その時の写真を持ってきましたので、そちらをご覧頂いて色々のご指導頂ければと思います。よろしくお願い致します。

私は2009年の3月にJリーグを退職しました。その時は毎日が日曜日だと思い、ゴルフをやったり、世界のサッカーを見たり、孫と遊んだりと考えていたのですが、残念ながらそうはいきませんでした。地域の活動を見ていると、様々な経験をし、サッカーをやっている人材が埋もれていて、あまり表面に出てきていないと感じ、私が育ててもらった愛知県に恩返しをしなければいけないという気持ちが大きくなってきて、またJリーグ勤務の時のように子どもの試合を見たり、フットサルの大会に顔を出したりと地域の活動に参加するようになりました。

妻の「何もしないとボケるわよ」との言葉もあり、彼女が怖いこともあり（笑）また動き出しました。

2. 大会実施の発端

資料：地域に根ざしたスポーツ活動

基本的な考え方(中塚先生の教え)

1.生活圏内での活動(地域の活性化)
2.生涯スポーツとして定着(アマチュアに引退なし)
3.すべての人に公平な活動(補欠はゼロ)
4.他の活動との連携・両立(人間性・社会性)
5.「する」「見る」「支える」「語る」が参加(仲間)

Jリーグのアカデミーに携わっている頃から、中塚先生に色々とお教わっているなかで、資料の1番に挙げた生活圏内での活動（地域の活性化）と、5番目の「する」「見る」「支える」「語る」が参加、つまり、仲間作りを地域でしたいという気持ちが強かったので、これができるものは何なのだろうと地域のなかで考えるうちに、私はこれまで子どもたちのサッカースクールを行ったり、11人のサッカーに携わ

ってきましたが、場所の確保が非常に難しく、自治体や学校の場所を朝早くから並んで抽選で確保したりというのは不確定で、何か良い解決方法がないかと思っていましたが、比較的自由が利く広場、遊び場が、私の活動範囲ではフットサル場にあることが分かりました。フットサル場は平日の昼間に行くと、よくこれで経営できているなど思う程に空いていました。

愛知県豊田市にある東海フットサルクラブはフットサル場が6面あり、仕切りを取り払うと11人制のサッカーができるスペースがありますが、それでも平日の昼間は特に空いています。この社長さんと、フットサルにもっと多くの人が参加してくれ、そしてこの場所を有効的に使うことができる方法がないかと話し合っていました。

豊田市を中心に各地域を見てみるとフットサル場を経営している会社が4社あり、その4社が合計で8施設を所有していて、やはりそれぞれが使用率が低く、特に1月から3月までの冬場にお客さんが少ない。その時期になんとか皆で利用できる環境を作っていく必要があるだろうということで、東海フットサルクラブの社長と話していたのですが、彼が言うには「フットサル場それぞれは、各自の運営で精一杯で横のつながりや情報交換もなく、またある程度決められたフットサルのお客さんを近隣同士で獲得競争をしていることもあるので、仲間同士で何かをしようという雰囲気は現状あまりないので、うまく施設同士で交流が出来れば良いが、難しいのが現実だろう。」というのが当初の状況でした。

4社の総会員数、これまでの長い歴史のなかで登録はしたけれどもそのまま退会した人等を含めると、フットサルをプレイしたことのある人数は20,000人を超えていて、相当数であるといえると思います。それでは、この人たちを対象に何かをやってみようということで動き出しました。

そして前出の、近隣の4社の社長さんたちと、「やはり皆でやろう、皆でフットサルで仲間作りをしよう。楽しい大会を組んだりしてフットサルを経営してる仲間間で情報交換しながら、地域の子供たちや皆を元気づけて行こう」という話し合いを何度か重ね、4社が大会を運営する事となりました。

大会を運営するにあたって、ドイツとの交流が企画に上がりました。大会参加者のなかからドイツに行ってもらって、ドイツのスポーツ環境を見たり、おいしいビールを飲んだり、サッカーを見たり、フットサルの試合をしたりしようということになり、参加者、フットサル場の人達のモチベーションを上げるために、色々な提案をしてきました。

3. ドイツとの交流、大会実施

それに先立つ2010年に、ドイツ人の弁護士とともに、日本でいう社団法人にあたる“e.V.”のライセンスをエッセン州から取得し、日本の子どもや指導者がドイツへ行って勉強したり楽しんだりすることのサポートを目的に、ドイツジャパンスポーツアカデミー（Deutsch-Japanische Sportakademie e.V.）を立ち上げました。現在、フランクフルトに事務所があります。その活動のなかでこのフットサル大会もサポートすることになりました。

大会企画当初に、ドイツサッカー連盟（DFB）とブンデスリーガにFutsal Cup in Japanをいう大会を実施するので協力してほしい旨を説明し、サポートを依頼しました。

そのなかで、数字が正しいかは分からないのですが、名古屋オーシャンズの櫻井嘉人 GM に話を聞いたところ、フットサルを楽しんでいる人数は 270 万人程いる、トップリーグには 160 名の選手が在籍している等の 10 ページ程の資料を作成し、DFB とブンデスリーガに提出し、サポートへの根回しをしていきました。

資料 : Futsal in Japan

The number of players: ca. 2,700,000 (125,000 (m:113,000 f:12,000) are registered with Japan Futsal Federation)
Top league (F-league): ca. 160 players (incl. 40 professional players)
Ages: most of them are over 18 years old below 35 years old
The number of facilities: ca. 800
The number of fields : 2,000 (90% of them are outside.)
Is generally accepted as five-on-five football and played outside.
People who played football in schools are playing futsal after graduating.
Many female are also enjoying futsal.

資料 : What is event?

What?: Futsal Cup (The main sponsor will add its name on it.)
When?: July to October, 2011
Where?: 15 futsal fields in Toyota-city in Aichi-prefecture
The Organizer: Deutsch-Japanische Sportakademie e.V.
Ca. 300 teams (ca. 2000 players) in Aichi, total 20,000 people will be involved.

そして実際に実施したのが、「ドイツ・ジャパン フットサル フェスティバル」です。フットサル中の若いスタッフが色々と考えてくれて、「フットサルに国境はない」をキャッチフレーズに、参加者は高校生以上とし、ミックスクラス（女性が常時 1 名以上プレーし、女性の得点は 2 点）と、オープンクラス（高校生以上であれば男女年齢を問わず）の 2 コースの開催、表彰は各クラス 1 位が 10 万円の旅行券に優勝カップ、2 位には 5 万円の旅行券、フェアプレー賞、抽選で 14 チームに 1 万円の食事券（名古屋市、豊田市の青年会議所等が提供）、デザート賞にモルテン賞。第 1 回として話題を豊富に用意しておかなくてはならなかったのも、走り回りながら協賛してくれるところを集めました。そして、決勝ト

資料：チラシ、大会形式

参加者は高校生以上

- ミックスクラス:女性常時1名以上
女性の得点は2点
- オープンクラス
高校生以上なら男女年齢問わず

表彰(各クラス)

1位: 10万円旅行券 優勝カップ

2位: 5万円旅行券
フェアプレー賞

抽選で14チームに1万円食事券
デザート賞 モルテン賞

全チーム対象:抽選でドイツ賞
旅行費用補助 80万円

ーナメントに参加した全 32 チームを対象に、抽選でドイツ賞（グループに旅行費用補助として 80 万円）を用意し、後ほど出てくる 7 名がドイツに渡りました。優勝したチームにドイツ賞を贈るといった話もあったのですが、賞品が高額になると賞品目当てに激しい試合も増えるであろうことを考えると、審判や大会運営に不安な点があるということで、抽選でドイツへ行くチームを決めることとし、皆にチャンスがある形式にしました。

資料：予選大会の施設

予選大会の施設

豊田市
東海フットサルクラブ
ANNEX 篠原

刈谷市
T b (刈谷)
BRN CAR (刈谷)

知立市
T b (知立)

常滑市
センプレフットサルクラブ

安城市
BRN CAR (安城)

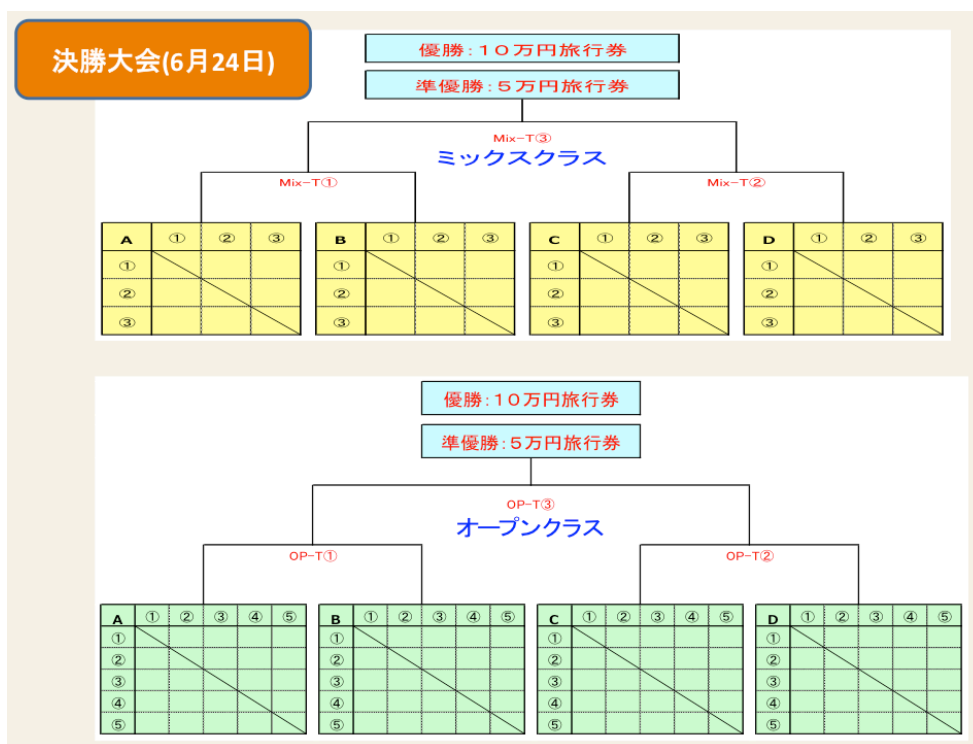
岡崎市
T b (岡崎)

こちらが、大会予選を行った 8 施設の場所になります。何故少し離れた常滑市が入っているかというと、私が愛知県サッカー協会にいたときに懇意にしていた審判委員長が常滑で活動しており、彼にも仲間になってやってみないかと声をかけてセンプレフットサルクラブでも予選を実施しました。

施設の規模によって決勝大会出場チーム数を先に決定し、それに従いそれぞれのフットサル場で決勝大会出場を巡って予選大会が行われました。

こちらが決勝大会の実施方式です。最初にリーグ戦を行って、準決勝と決勝戦はトーナメントとなります。

資料：決勝大会トーナメント図



そして、予選大会数と参加チームの統計です。

資料：予選大会、参加チーム数統計

施設名		東海フット サルクラブ	BRINCAR	Tio	サンプル	計
予選大会数	オープン	9	4	2	3	18
	ミックス	5	2	3	1	11
参加チーム数	オープン	59	16	6	12	93
	ミックス	32	7	10	7	56
参加チーム合計		91	23	16	19	149

6ヶ月半の大会期間を通して、トータルで149チームが参加してくれました。もう少し集まるかと思っていたのが本音ですが、決して少なくはないチーム数ですし、お客さんの少ない1月から3月までに何とか集客しようというフットサル場経営の視点から見ると、1月は少なめでしたが2月3月には意外と参加チームが多く、その点では良かったと思っています。第2回大会以降に向けて、この時期の集客は引き続き検討事項と言えます。

参加チームを地域別に見ると、やはり豊田市が一番多く、続いて常滑市、刈谷市、岡崎市、安城市の順となりますが、その他を見ると、豊橋市や、三重県に近い一宮市といった結構遠くからの参加チーム

もありました。実施フットサル場以外の地域からのチームがいたことは非常に良かったと思っています。

4. 大会実施風景

(写真を指しながら)こちらが決勝大会開会式の風景です。このように選手の周りで子どもや家族が見ているなかで開会式を行いました。かなりたくさんの人たちが集まってくれました。

こちらはオープンクラス優勝チームですが、このチームが抽選でドイツ賞も引き当てて、総取りとなっていました。

そして、このオープンクラス優勝チームには、小学校3年生から私がサッカースクールで教えていた選手がいました。彼がチームを作って大会に参加してくれて、優勝賞品にドイツ賞を総取りしたことになることによって、何か不思議な縁を感じる結果となりました。

大会には3台の屋台に出店していただき、結構儲かったと言って帰って行きましたので、成功とやっていいのではないのでしょうか。当初はこちらにお金をくれるのかと思っていたのですが、話を聞くと、保証金をこちらが払う必要があるということで、それならば出店してもらわなくてもいいと思っていたのですが、保証金なしでも来てくれる屋台が3台あり、盛り上げに一役買ってくれました。屋台を呼んだ手前、買い物をして食事をとってもらい昼休みを1時間程設けて、その間にパフォーマンスをやってもらったり、子どもたちも小さな囲いなかで1対1のミニゲームをしたりといった企画も催しました。なかなか盛り上がっていて、Jリーグの試合会場の外でこのようなイベントをしても面白いと話していました。岐阜県から特別参加してくれた人がいて「FC岐阜でも一度やってみようかな」と言っているところ。子どもたちから「私もやりたい」という声が多く上がっていました。

“社会の閉塞感を吹っ飛ばせ“ということで、このようなイベントを実施したり、将来のリーダー養成のためにドイツへ行ったり、あるいは食事券や旅行券を使って仲間、家族と楽しい旅行や食事をしてもらいたいと思っています。しかし11月までの使用期限があるなか、現状10万円と5万円の旅行券がまだ使われず残っていて、どう使うのか色々迷っているところなのかもしれません。旅行券の使用について、一つ面白い質問が、旅行券使用に関してお願いしたJTBを通してあって、「お父さんが北海道に出張に行くからそれに使っていいですか？」というものでした。お父さんが8万円を子供にあげるから旅行券を渡してくれという話のようでしたが、趣旨が違いうだろうということで一応駄目だと言っておきました(笑)。発想の違いがあって面白いなと感じました。

5. ドイツでの研修

ドイツでは、DFBで研修をしてきました。皆さんご存知かと思いますが、ドイツ国内でDFBの会員が680万人、クラブが26,000でチームが177,000あります。ドイツでの研修については別途海外研修報告書を作成しているところです。

報告書作成者注：2012年度ドイツサッカー連盟登録選手：680万128人、登録クラブ：25,641クラブ、登録チーム：169,168 (DFB Mitglieder-Statistik 参照)

フランクフルト領事館に表敬訪問も行ってきました。こちらは重枝総領事ですが、「ドイツのなかでは、東北の震災に対して心配してくれたり協力してくれるドイツ人がたくさんいるので、せっかくドイツと日本のフットサルでの交流をしているのであれば、震災地域にも活動を拡大できないか」という話し合いを総領事ともしてきました。なんとかその方向に持って行ける努力をするつもりです。

ヘッセン州スポーツ協会にはホテルが併設されていて、ここに宿泊しました。歩いて5分でコメルツバンク・アリーナ（アイントラハト・フランクフルトのホームスタジアム）に着く、とてもいいところに建っていて、ここにはホテルだけでなく色々な種目の施設があり、プールがあり体育館があり、卓球場がありといった様子です。ドイツにはスポーツシュレーゲが近隣にたくさんあるので、ここには芝生のサッカー場はありませんでした。宿泊は、1泊朝食付きで、最近円が高くなってきたこともあって、ざっと5,000円くらいです。夕食はバイキング形式でかなりいい食事が600円程です。

参加者のなかにはドイツで就職したいという人もいて、自分で就職活動をしてみてはと話していましたが、ヘッセン州のスポーツ協会では、大学生の6ヶ月間のインターンシップを受け入れてくれるという話もあったので、今後そういった活動も行っていきたいと思っています。

たまには皆で遊びに行こうということで、ハイデルベルク城観光にも行きました。地図をもらって向かったのですが、ライン川対岸の山へ行ってしまうと、違う違うと言いながらどんどん山を登って行くと下にハイデルベルク城があって、案の定、道を間違えていましたが、そのおかげで美しい景色が見れて皆大満足していました。

在フランクフルトの日本企業の人たちは、毎週土曜日に集まってサッカーをしています。ここでは18歳、19歳のドイツのアマチュアチームでプレーをしている日本人の子どもに助っ人を頼み、11対11の試合を行いました。今回は就職活動も一つの目的でしたので、日本企業の方々と質疑応答の時間も設けました。

フットサルはアイントラハト・フランクフルトのフットサルチームと、地元フットサルチーム、2チームと試合を行いました。

あとは、ちょうどブンデスリーガの開幕戦の時期でしたので、レバークーゼンとの開幕戦を観戦しました。フランクフルトには乾選手がプレイしています。彼がいいプレイを見せてくれたので楽しく観戦することができました。フランクフルトは昨シーズン最終戦のサポーターの乱入に対してDFBからペナルティーを受け、観客の入場制限がかけられて、スタジアムの収容能力52,300人に対し、この日は27,000人のみでした。年間シートが優先になっていたこともあって、我々もチケットをとるのが非常に難しかったのですが、独日協会からDFBにお願いして手配してもらったチケットは高価で、メインスタンド前列で一人12,000円でした。ちょっと高いとは思いましたが、せっかく来たので試合を見ようということで購入しました。

報告書作成者注：フランクフルトサポーターは昨シーズン、ブンデスリーガ1部への昇格を決定した32節のアーヘン戦から最終節まで3節連続（33節1860 ミュンヘン戦、34節カールスルーエ戦）でピッチへの乱入、相手サポーターへの挑発、アウェイブロックへの進撃、花火等の火薬使用等の問題を起こした。これに対しDFBは10万ユーロの罰金と2012/2013シーズン開幕戦の入場者制限の罰則を課した。

※公式ホームページによるとコメルツバンク・アリーナの収容人数（サッカー開催時）は51,500人、また開幕戦の観客数は27,953人

6. 参加者・スタッフの声と今後の展望

こちらは、実施結果です。

資料：実施結果

参加者の声

- ①決勝トーナメントに多くのチームが集まり、日ごろ経験できない緊張した試合ができた。
- ②家族ぐるみ楽しくすごせた。
- ③来年はチャンピオン目指し頑張る。
- ④豪華商品で抽選会が盛り上がった。

※しかし

- ①予選大会の1試合当たり参加チーム数がフットサル場間でバラツキ大。
- ②ドイツ研修に行きたくても会社の休みが取れない。半額負担でもキツイ。

対応策

- ①第一回決勝大会の盛り上がりの様子をポスター、報告書等で紹介する。
- ②活動の趣旨を地域交流・青少年の育成の2つに区分する)
 - i 予選大会から決勝大会までとドイツ研修を区別する。
第一回の決勝大会までは大いに盛り上がった事からこの方法で継続。
 - ii ドイツ研修は大会参加者も含め地域の高校生、大学生から希望者を募り、
青少年の育成にこの大会での収益金を充てる事で継続する。

問題点は、予選大会では8チームでリーグ戦を行い決勝進出チームを決めた会場もあれば、4チームで行った会場もある等、ばらつきが多かったこと。そして、ドイツ研修に行きたくても会社の休みが取れないため参加することが難しく、また半額負担も厳しいということです。今大会ではオープンクラスで優勝し、ドイツ賞も引き当てたチームが直前になってキャンセルになり、大会に参加していない愛知淑徳大学サッカー部の部員5名と女性マネージャー2名を代わりにドイツへ連れていきました。大会に参加し、抽選にも当たったのにドイツに行けないというのは、今後の大きな課題となります。やはり社会人でお盆休みをとっておいて、すぐその後に1週間ドイツに行く為に休みを取るの難しいだろうという

話が出ました。

対策としては、今大会の盛り上がりをポスター等で紹介することと、活動の趣旨を地域交流と青少年育成の2つに区分することを考えています。大会とドイツ研修を区別し、大会参加者はもちろんのこと、地域の高校生、大学生から希望者を募り、大会の収益金を当てることでドイツ研修を継続していくつもりです。地域の活性化、仲間作りと、将来のリーダー育成の2つの目標を軸に、今後の活動を計画していきます。

第2回大会へ向けての課題としては、予選大会の会場拡大、名古屋地域への広げようと声をかけているところです。そして先ほど話に上がりました、東北震災地域からの招待。予算のなかで宿泊費用だけでもこちらで負担することができないか等、福島県と調整をする為に10月に福島へ行く予定です。最後に、地域のリーダー養成としてドイツ研修は継続して行きます。

資料：予選から担当してきた若いスタッフの声

- ・4施設合同でこの壮大なプロジェクトを進めて行く事に
うまく行くのだろうか？ 期待より不安の方が大きかった
- ・やはり未知なる挑戦や、楽しい事を考えたりする時、大人子供関係なく人は目をキラキラさせるものだな～
- ・決勝大会当日の道筋が回を重ねる事に決定して行きました。
この頃になると不安は消え、やってやるぞーと自分を鼓舞したものです。
- ・みなさん「盛り上がってるね～すごい人の数だね、楽しかったよ、悔しかったな～、毎年やるの、来年も出たいな～」など笑顔でお話出来たのが嬉しかった。
- ・閉会式、大抽選会を盛大に迎えた、勝ったチームも負けたチームも、笑顔が絶えない
そんな閉会式であった。ここに全てが集約されていたのではないかと思う
- ・こんな大きなプロジェクトの一員として参加出来た事に感謝したいと思います。
本当にありがとうございました。

予選から担当してきた若いスタッフの意見ですが、最初は不安が大きかったが企画を進めるうちに会議が楽しくなってきたですとか、今回若いスタッフが徐々にのめり込んできて一生懸命な姿が見られたことも収穫のひとつと言えます。

急ぎ足ですが、今回このような活動をしてきました。そして大きな課題も残りました。ドイツに行くことが大きな目玉になると我々は考えていましたが、実際そうではなかったこと。とはいえ今の若い子どもたちにヨーロッパのスポーツを見せて、長い目で見て将来の地域のリーダーになってほしいという希望もありますので、ドイツでの研修とフットサル大会の決勝大会までの流れを第2回目はどのように盛り上げながら皆に理解してもらい、さらに協賛していただくところをどう集めるかをこれから考えるのですが、第1回大会としてはうまくいったのではないかと考えています。今後この大会をうまくまと

めていきながら、最終的には色々な地域から参加してくれるような大会に育てたいと思っています。
色々ご意見頂いて、修正するところは修正したいと思います。皆様にご意見戴ければ幸いです。

<ディスカッション>

◆大会の企画と運営

中塚：ありがとうございます。私はこの大会の企画当初からお話を伺っていたのですが、なかなか全体像が掴めず、一体山下さんはどのようなことをやろうとされているのだらうかと思っていたのですが、今日の話をお聞きして全てが繋がりました（笑）。すごいなと思いながらお話を伺っていました。ここからはフリーでディスカッションをしたいのですが、最初に私から質問です。かなりのお金がこの事業を展開する上で必要になり、色々なところがスポンサードして成立していると思うのですが、どういった方法でこの企画を、特にお金の面で実行されたのでしょうか。

山下：実はお金はそれほどかかっているわけではありません。いま税理士が最終チェックをしているところですが、メインスポンサーが100万円。この会社の経営者は、私が名古屋グランパスにいた95年にオランダに研修に連れて行った地域の指導者30人のうちの一人で、当時は大学を卒業したばかりの青年でしたが、その研修で自分の人生が変わったと言ってくれています。今回、この大会について協力をお願いすると、快く引き受けてくれました。協賛金120万円と大会参加費298,000円が予算の全てです。運営そのものはほとんどボランティアです。予選大会は各フットサル場にお任せして、決勝大会に進出するチームを確定してもらいました（各チーム大会参加費12,000円のうち10,000円がフットサル場に支払われる）。

中塚：私たちが東京でフットサル大会を開催する場合、審判代や会場費でかなりの費用が必要になります。今回はフットサル施設が運営に関わっているので会場費は必要なかったのだと思いますが、審判費等はどのようにされたのでしょうか、やはり各会場でボランティアで運営されたのですか。

山下：会場費に関しては、先ほどお話しさせていただいたように、閑散期にお客さんを呼びたいフットサル場が運営していますので、大会運営側は一切使用費を払っていません。それから審判に関しては、豊田市サッカー協会のフットサル委員会と話をし、弁当のみで引き受けてくれて、豊田市以外の地域からも審判員が集まってくれました。と言いますのも、豊田市サッカー協会では、フットサルをもっと普及させようという動きのなかで審判員養成拡大の計画もあり、この大会をうまく使って審判養成を行ってはどうかと私から投げかけ、またお願いをしましたところ、このような形で審判を引き受けてくれました。今後も同じように続いていこうと考えています。お金がかかった個所は、決勝大会中のパフォーマンスに1日1万円、そしてMCに6万円を払ったくらいで、その他に大きなお金が

動いたところはありません。やはり会場費が必要ないというのは大きかったです。

中塚：賞品リストが出ていますが、この賞品も各スポンサーが提供したのでしょうか。

山下：青年会議所や企業から協賛を集めるのに時間が掛かりましたが、それに掛かった費用はここが負担して協賛頂いたものは全て大会に充当しました。

参加者：フットサル場を経営している4社がこれまではバラバラで交流とはなかったということでしたが、この大会を契機にそれか変わったということはあったのでしょうか。

山下：フットサル場を運営している若者達の間で、「もっと、自分たちの施設をしっかりと運営して行こう」といった意見が聞けたり、「いつもとは違うお客さんが、様々な地域から集まってきたのがすごく嬉しかった。」とっていました。交流の面で言うと、大会実施の1年前から、必ず月に1回は、フットサル場と実際に運営している若者たちと集まって、様々な点について話し合ってきました。ルールをどうするか、審判をどうするか。一番話題に上がったのは、外国人のチーム、特にブラジル人のチームが賞品目当てで出場してきてドイツに行きたいと言ってきたらどうするかでした。最終的にはポスターに書いてある通り、“フットサルに国境はない”ので、抽選で当たった人が誰であろうがドイツに行くんだ、ということを決めました。会議をしているうちに皆がどんだのめり込んできて、若い人たちからもいろんな意見が聞けて、私も非常に勉強になりました。

◆ドイツとフットサル

徳田：私はここに来るまで勘違いをされていて、ドイツでフットサルのフェスティバルがあって、それに日本からチームを連れていったのだと思っていました。

そもそも論になってしまうのですが、なぜドイツだったのですか。

山下：私自身がドイツのフランクフルトに社団法人（ドイツ・ジャパン・スポーツアカデミー）を作ったということがあり、ドイツに多くの仲間がいて日本から人を連れていっても安心できるということが一番です。隣のオランダも良いのですが、まずはドイツに連れていきました。

徳田：フットサルとドイツがイメージとして結びつきませんし、やはりスペインやポルトガル、ブラジルに行くというならば想像しやすいのですが、今大会のコンセプトとしては愛知県のフットサル施設の活性化というのが先にあるので、その為にドイツに研修に行くということなのでしょう。

山下：ドイツに行く、ということで施設の皆のモチベーションを引き上げるということもありましたし、

参加者もドイツ研修が目玉となって集まってくるだろうという目測があったのですが、結局ドイツ研修だけ浮いてしまった、私たちが考えていたほど皆はドイツに行きたいとは思っていなかった、というのが現実でした（笑）。

徳田：例えばスペインに行けるぞ、となればおそらく大分違うと思うのですが。

山下：そうですね。ただドイツのブンデスリーガのチームもすべてフットサルのチームを持っています。というよりも、おそらくサポーターがチームを作ってクラブに認めてもらい、オフィシャルのユニフォームを着てプレーしているのだと思います。結構強くて、今回アイントラハト・フランクフルトのチームには9対0で負けました。また、ブンデスリーガやDFBと話をした際に、「なぜ日本はフットサルを屋外でやっているのだ、それは邪道で、フットサルは屋内でやるものではないか」と言われました。5対5のミニサッカーか、と冗談を言われましたが、結局日本では、芝のサッカー場にしてもインドアにしても、場所を確保するのが難しいので、工夫して人工芝で小さく区切ってプレーしているという話をしていました。

報告書作成者注：ブンデスリーガ数チームのHPを確認してみましたが、フットサルチームを持っていないだろうと思われるクラブがいくつかありました（バイエルン・ミュンヘン、ハンブルガーSV、ドルトムント、シャルケ等）。

参加者：ドイツというと、フットサルよりインドアサッカーの方が盛んなイメージがありますよね。昔はプロの選手がオフシーズンによくプレーしていましたよね。

報告書作成者注：ドイツにおけるインドアサッカー（Hallenfußball）は80年代にブームとなり、多くのブンデスリーガのクラブが、ウィンターブレイク中にインドアサッカーを行い、テレビ中継もされていた。また88年からはDFB主催の大会が始まり、ブンデスリーガ同士が戦うこの大会は人気を博したが、ウィンターブレイクが縮小された等の影響もあり、2001年以降、大会は開催されていない。現在は、短いウィンターブレイク期間に、往年の名選手が大会を行う模様がテレビ中継される程度である。

山下：最後にプレーした会場は田舎の小学校の体育館でした。試合時間や得点が表示される電光掲示板もあり、素晴らしい施設でした。そこを地域のクラブが使用していました。

報告書作成者注：ドイツでは部活動がないので、学校の施設（特に体育館）は放課後、周辺のスポーツクラブが利用することがよくある。また、サッカーにおいては、冬場はリーグ戦は行われず、下の年代はその間は体育館で練習、試合（インドアサッカー）を行うことが通常である。

参加者：地元フットサルチームとの結果はどうでしたか。

山下：勝ちました。3点か4点とり、参加した女の子もプレーさせてもらいました。

参加者：ゴールが大きくないですか？

中塚：このゴール、3×2mより大きくないですか？ 写真のドイツ人が小さいだけかな（笑）。

山下：大きいですか？ 確認してみます。

中塚：ドイツはハンドボールも盛んなので、わざわざそれより大きいゴールを用意することはないような気もしますが。

山下：確認してみます。

報告書作成者注：通常ドイツの体育館にあるゴールは3×2mです。サッカーの室内トレーニング用で稀に5×2を目にするもありますが、高さが足りないことはまずないと思われます。

◆ドイツでのさまざまな交流

山下：チャンスがあればドイツで就職したいという学生もいたので、在独日本企業のチームとの交流もいい企画だったと思っています。

中塚：ちなみに2006年に、サロン in フランクフルトを牛木さんの斡旋で2回行いました。2回目はフランクフルトのスポーツクラブを訪問したのですが、その際に通訳をしてくれた瀬田元吾君が、いま、フォルツウナ・デュッセルドルフで働いています。彼は自分でフォルツウナに売り込んで日本人向けの部署を立ち上げてしまいましたよね。

山下：磯さんという女性と2人で働いていますね。彼は元気でやっています。

中塚：今回の参加者は瀬田君のような仕事がしたいということなのでしょうか。

山下：ドイツにはたくさんの大手企業が現地法人を持っていますので、ドイツで就職できたら嬉しいという参加者が3名ほどいて、ドイツ在住の日本企業労働者の方々に、どうすれば就職できるのか聞いて

ていました。それと、ヘッセン州の体育協会には、日体協の企画でもう20年も前から大学生が来てい
ると言っていました。インターンシップを受け入れてくれるとのことですが、ドイツ語と英語は勉強
してきなさいとも言っていました。

参加者：ヘッセン州のサッカー協会もあるんですよね。会員はどの程度いるのでしょうか。

山下：総合スポーツクラブのほうが多いので、770あるクラブのなかで、サッカーもやっているしバレー
ボールもやっているしといった形で、ほとんどが総合スポーツクラブですね。ヘッセン州スポーツ協
会の施設内でやっているのは、指導者研修やドイツ・ヘッセン州の代表選手を育てるということです。
特に卓球、水泳、自転車等で、サッカーはDFBが実施するので、ここでは他の競技を強化し、普及活
動は行わずクラブに対して支援をしています。クラブが普及や育成を行い、ヘッセン州スポーツ協会
ではエリートの要請を行っています。

報告書作成者注：ヘッセン州サッカー協会登録数 選手：518,125人、クラブ：2,107、チーム：12,277

参加者：ドイツで卓球をしている日本人選手もいますよね。

山下：意外といろんな選手がいますね。

中塚：今年度も、第二回大会に向けての準備が始まるかと思います。メールのやり取り等で進捗状況を
教えていただいて、我々からもささやかながらアイデアが出せればなと思います。どうもありがと
うございました。

山下：ありがとうございます。一番やりたいのは、東北からの参加者招待です。先月も福島に行ってき
ましたが、郡山市のなかでもう一度調整をしましょうという話になっていて、うまく行けば来てくれ
るだろうというところです。子供たちは外で遊ばなくてインドアで遊んでいるので、子供たちにプレ
イする機会を与えてあげたいと思っています。どの年代を招待するかはわかりませんが、その点でご
協力頂ければと思います。

中塚：それでは、国際交流の話の続きです。徳田さんが韓国との親善フットサルを長年実施されていま
す。その点について徳田さん、お願いします。

第Ⅱ部 日韓親善フットサル

徳田仁（(株)セリエ）

今年で15回目となる日韓親善フットサル大会ですが、直近の数回分のプログラムを持ってきましたので、そちらを回していただきながら話しをしたいと思います。

1. 日韓のフットサルの歴史

日韓のフットサルの歴史ということで、まずはフットサルがどのようにして日本に入ってきたのかを、年度を追っておさらいしておきたいと思います。

1994年にFIFAが、南米やヨーロッパにあったサロンフットボールやミニサッカーと呼ばれていた競技をFUTSALという名前で統一しました。日本はそれにすぐ反応し、1995年には日本フットサル連盟が、日本ミニサッカー連盟から名称変更し設立され、1996年には第1回の全日本フットサル選手権大会が開催されました。かなり早いペースでオフィシャルが動いていたわけですが、この頃の全日本フットサル選手権大会は、今では考えられませんが、「人工芝」で開催されていました。第1回と第2回大会は有明コロシアムにわざわざ人工芝を貼って開催していたのです。なぜかという、初期の段階でフットサルを日本に普及させようと奮闘したのは、「ソーコー」という人工芝業者だったことに関係していると思われる。

全日本フットサル選手権の前に、民間レベルの全国大会（ペプシカップ）が2回程開催されていました。オフィシャルよりも民間大会が先に開催されていたというのが、この時期の日本フットサルの特徴と言えます。私自身のフットサルとの関わりも、1996年春から2002年夏まで、調布でフットサルコート運営していたことがスタートになっています。

そんなころ、「人工芝フットサル場が儲かるぞ」ということで全国に屋外の人工芝フットサル場が出来始めました。テニスコートから転用されたのもこの時代です。

そして、フットサルが少しずつ普及してきた2004年に、まだワールドカップという名称ではありませんでしたが、FIFAフットサル世界選手権が台北で開催され、私の会社では今年のようにワールドカップ観戦ツアーを募集したのです（1996年スペイン大会、2000年グアテマラ大会も観戦ツアーを募集しましたが、日本が出ていないこともあり、集客ゼロでした）。2004年のツアーは約60人程の参加者がいましたが、そのほとんどはコアなファンと関係者（メディア、フットサルコートの経営者やスタッフ）で、フットサルとは一体どのようなものかを研修するために参加された方が多かった気がします。その後、2006年には日本がAFCフットサル選手権で初優勝し、2007年にはFリーグ設立と、急速なテンポで日本のフットサルは進んできました。

日本代表は2008年ブラジル・ワールドカップに2度目の出場を果たしましたが、この状況を見た韓国は、2009年に韓国フットサルリーグ＝FKリーグを設立し、プレ大会が開催され、現在に至っています

(HP 上では第 1 回大会と記載)。

日韓親善フットサル大会は、こんなフットサル界の歴史とともに回を重ね、第 15 回となる 2012 大会が今年開催されます。2010 年と 2011 年のプログラムを回しますので後でご覧下さい。

今年 5 月に、日本は AFC のフットサル選手権で 2 回目の優勝をし、11 月にタイで行われるワールドカップに出場するのですが、これまでの日本のフットサルの歴史を韓国が後から追ってきているというのが、私が感じている両国のフットサルの歴史です。

資料：日韓のフットサルの歴史

1994 年	F I F A が「F U T S A L = フットサル」としてルールと名称を統一
1995 年	日本フットサル連盟 設立 (日本ミニサッカー連盟から名称変更)
1996 年	第 1 回 全日本フットサル選手権大会 開催
2004 年	F I F A フットサル世界選手権 日本代表が事実上初出場 (1989 年は招待出場)
2006 年	日本が A F C フットサル選手権 初優勝
2007 年	F リーグ設立
2008 年	F I F A フットサルワールドカップ ブラジル 2008 日本代表が 2 度目の出場
2009 年	F K リーグ設立 (韓国フットサル連盟 設立)
2012 年	日本が A F C フットサル選手権 2 度目の優勝
2012 年	F I F A フットサルワールドカップ タイ 2012 日本代表が 3 度目の出場

2. 日韓親善フットサルのはじまりとあゆみ

「日韓親善フットサル大会」は、私の会社が調布のフットサルコートを運営していた頃のことです。たくさんのお客さんが来てくれて収益が上がっていました、その収益を少しでもお客さんに還元しよう、何か楽しい使い方がないかと考えていたところに、韓国との橋渡しをしている友人がいて、1998 年に韓国にチームを連れていったのが始まりです。

資料「日韓親善フットサル大会」をご覧ください。

第 1 回大会は、韓国でも人工芝のグラウンドでした。準優勝の大広ケリマッセは、このころのフットサル界では少し知られた名前で、キャプテンは中村恭平君、甲斐修侍君もこのチームでプレイしていました。その後、CASCAVEL やウイニングドック、森のくまさん (現フウガすみだ) といった、現在 F リーガーになっている選手たちがこの大会に参加していたことがおわかりいただけると思います。

先ほど話が出たように、初期のころ日本ではフットサルが人工芝でプレーされることが多かったのですが、普及が進むにつれ、やはりフットサルは屋内の競技であると言われるようになり、全日本フットサル選手権も屋内で開催されるようになりました。

資料：日韓親善フットサル大会 1998年-2011年

開催年月日	優勝	準優勝	第3位	会場	
第1回	1998年 10/31	ソウル永西 (KOR)	大広ケリマッセ (JPN)		洪川フットサル場 (人工芝)
第2回	1999年 12/11-12	CASCADEVEL (JPN)	ソウル永西 (KOR)		ヨンチョン初等学校・体育館
		ヘブロン (KOR) ※	パラレッズ (JPN) ※		
第3回	2000年 10/28-29	ウイニングドッグ (JPN)	安山市 (KOR)	河南市 (KOR)	漢陽大学・五輪体育館
		パラレッズ (JPN) ※	ヘブロン (KOR) ※		
第4回	2001年 12/1-2	ソウル永西 (KOR)	P E L E (JPN)	F C ダビデ (KOR)	安山市・ガムゴル体育館
第5回	2002年 11/16-17	森のくまさん (JPN)	ソウル江西 (KOR)	P E L E (JPN)	富川市・松内体育館
第6回	2003年 12/6-7	B F C K O W A (JPN)	ソウル江西 (KOR)	M A N N E R (JPN)	富川市・松内体育館
第7回	2004年 12/11-12	ソウル江西 (KOR)	L M F C (JPN)	京畿平澤 (KOR)	富川市・松内体育館
第8回	2005年 12/3-4	慶尚北道 (KOR)	C A F U R I N G A (JPN)	ソウル江西 (KOR)	京畿道平澤市体育館
第9回	2006年 12/2-3	千駄ヶ谷 F C (JPN)	京畿龍仁 (KOR)	全北ウイングス (KOR)	京畿道龍仁市体育館
第10回	2007年 12/1-2	PUBLIC VOICE (JPN)	又石大学 (KOR)	江東フットサル (KOR)	京畿道龍仁市体育館
第11回	2008年 12/13-14	又石大学 (KOR)	江東フットサル (KOR)	龍仁フットサル (KOR)	京畿道龍仁市体育館
第12回	2009年 12/12-13	又石大学 (KOR)	F S ソウル (KOR)	イエスグミ FC (KOR)	京畿道龍仁市体育館
第13回	2010年 12/4-5	せみしぐれ (JPN)	ランダム F C (KOR)	又石大学 (KOR)	京畿道龍仁市体育館
第14回	2011年 12/10-11	ブルーFC (KOR)	富川ルーザー (KOR)	ウィナーFC (KOR)	京畿道龍仁市体育館
		廣津フットサル (KOR)*	東京ユナイテッド*	龍仁フットサル (KOR) *	

2000年代に入ると、フットサルを競技としてプレーする人と、楽しみとしてプレーする人との境目ができるようになりました。屋外の人工芝のコートは楽しむためのプレーヤー向きで、グリーン的人工芝のほうが屋外では見栄えが良いし、別にフットサルのルールに忠実である必要もなく、ミニサッカーなんだけどフットサルと呼んでいるという感じ。

一方で、競技志向が高まり、トップのFリーグを目指して、サッカーでは芽が出なかったがフットサルで頑張ってみようという人たちが増えてきました。競技者がプレーするために利用できる体育館が増え、また屋内のフットサル施設もでき始めてきました。ちょうどこの頃、私がとしまえんのプールの更衣室が「天井が高く、コートが3面とれる広さがある」ということを発見し、企画書を書いて、西武からとしまえんにプッシュして、今の「フィスコフットサルアリーナとしまえん」ができました。そういった施設が少しずつでき始めました。

オフィシャルのリーグとしては関東リーグができ、各都道府県リーグも整えられ、Fリーグが設立され、日本のフットサルは遊びと競技者が別れる形で発展してきたと言えます。

3. 日韓のフットサル環境比較

日本と韓国との比較です。日本はFIFAの通達に素早く反応し、フットサル整備してきた経緯がありますが、それに比べて韓国では、いい選手は有名高校から有名大学へと進み、Kリーグ入るというシステムになっているように、フットサルにおいてもKFAは、FKリーグ以外の層にはタッチしていません。では韓国のフットサルは誰が普及させているかというと、行政の下にある「国民生活体育連合会」という組織が、体育としてフットサルを扱っています。そのなかに「フットサル連合会」があり、日韓親善フットサル大会は、このフットサル連合会と共に開催しています。フットサル連合会は各行政区ごとに地域の大会を行っており、その頂点を決める全国大会の上位入賞チームと、日本から連れていったチームが試合をするというのがこの大会です。大会発足当初は日本のチームが圧倒的に強かったため、韓国のチームは強い日本のチームと試合ができるこの大会を楽しみにしていました。

日本のようにコート料金を1万円くらい払って、土日にフットサルを楽しむという感覚は韓国にはなく、体育だからお金は誰か別の人が払ってくれるというのが一般的で、実際に韓国で私の友人が参加費をとってフットサル大会を企画しようとしたところうまくいきませんでした。決定的な違いがあるようです。

しかし、フットサル連合会の元で一生懸命にプレーしている選手たちはいます。ただし、KFAとフットサル連合会の間では情報の交換はほとんどありません。韓国もワールドカップ出場を目標にはしていますが、KFAが情報を持っているサッカーのうまい大学生が韓国代表として選ばれてしまうので、底辺のプレーヤーにどれだけいい選手がいても引き上げてもらえないという残念な状況になっています。

FKリーグができた際に韓国フットサル連盟も設立されたのですが、これはあくまでFKリーグのための連盟であって、底辺の普及には手を出していません。ただし、フットサル連合会のメンバーがほとんどフットサル連盟を構成しており、人脈はつながっているはずなので、今後修正できることを期待しま

す。

第 1 回大会から一緒に関わってきている、現・国民生活体育フットサル連合会・会長であるキム・テギル氏が KFA フットサル文化委員長になっているのですが、なかなかうまく行かないのが現状のようで、本人もこうコメントしています。

「一日も早くフットサルの独自のポジションを確立させ、専門性を強化していく必要がある。これまではフットサル国際大会に普通のサッカー選手（＝この意味は、フットサルを専門にプレーしている選手ではなく、サッカーのうまい選手）を送り出してきたが、それはサッカーとフットサルの両方にとってもどかしいことだった。これからは、少し時間がかかろうともこのフットサル・リーグで育ち、専門性を備えた選手たちでフットサル韓国代表を形成し、彼らを国際大会に送り出す必要がある」

彼はよく問題点がわかっています。

大会は毎年 12 月初旬に開催するのですが、第 4 回大会の頃から日本ではオフィシャルの大会が増えてきて、時期的に予選などと重なることが多くなり、強いチームを韓国に連れて行けなくなってきました。もちろん、この時期は F リーグも開催中ですし、プーマカップの予選もこの時期です。最近の大会で成績が良くないのは、強いチームを連れていけなくなってしまうというこちら側の事情もあります。

この問題もなんとかしたいと思いつつ、今年の大会では初めて U-18 のチームを連れていきました。予想以上に盛り上がったのは良かったのですが、日本では考えられない親同士の殴り合いの喧嘩が始まったりして、高校生に見せてもいいのかと思った場面もありましたが、「海外では何が起きるか分からないから、想定できないことが起こっても冷静に対処しなければならぬ」とポジティブに説明しておきました（笑）。

第 2 回、第 3 回大会では女子チームも連れていきました。将来的には復活させていと考えています。（ちなみに、パラレッズという、当時の有名チームが参加していました。）

韓国は 11 月に入試で体育館を使うのでまだ確定ではないのですが、今年は、12 月の 1 週目に開催しようと計画しています。興味がありましたら是非韓国へ視察に来ていただきたいと思います。

余談になりますが、実は 1 度だけ日本に韓国チームが遠征してきて大会を実施したこともあります。その頃は当社が東京ヴェルディのスポンサーをしていた関係で、ヴェルディから女子のチーム（メニーナなど）を呼んだりしました。その中には現在なでしこジャパンとして活躍している選手もいました。

こんな活動を 15 年間していますので、興味のあるチームがいる場合は是非紹介していただきたいと思っています。ありがとうございました。

<ディスカッション>

中塚：少しだけ補足させていただきます。去年は「東京ユナイテッド」が参加しましたが、このチームは、東京都 U-18 リーグの関係者のチームです。「リーグ選抜を連れていこう！」という話が出てきたのは間際になってからです。このチームを公的に派遣する場合は、JFA から KFA へ申請しなくてはな

りません。事業計画も予算もありません、

そこで、「選抜チーム」を提案した府中アスレティックの峯山氏が、希望する高校生を募って韓国へ行くという、ある意味危ないツアーでした。チーム名も、最初は参加者の所属チームの頭文字をとって「筑波府中なにがし」という名前でした。2012年度は筑波大附属高校の生徒も1人参加し、できそうです。この時期にはテストがあって、成績のあまりよくない生徒だったので担任は心配していましたが、彼の感想は「参加できてすごく良かった」というものでした。普通の高校生が海外遠征なんて出来ないですし、府中アスレティックの選手と一緒に過ごせたことも喜んでいました。やはり海外に行くというのは、プラスの要素があると感じています。今年もリーグ選抜で行こうと準備をしているところですが、例によって難航しているところです。

徳田：難航してないですよ（笑）。

参加者：参加者は18歳以上なのですか？ 大学の選手でもいいのでしょうか。

徳田：元々は18歳以上の大会で、昨年からU-18のチームも連れていったということです。

参加者：これはいくらくらいかかるのですか。

徳田：旅費として5万円です。

牛木：韓国側の主催団体は国民生活体育連合会ですが、日本側の派遣主体はどこなのですか？

徳田：日本側は当社となっています。

牛木：セリエですか。

徳田：はい。本当は2000年大会に、東京のフットサル委員長を連れていき、今後は連盟どうし実施してほしいと話して動いてもらったのですが、韓国側にフットサル連盟がなく、行政と協会のやり取りになってしまうのでうまく行かず話が流れてしまい、当社がやり続けているという状況です。もう韓国側にも連盟が設立されたので、出来れば連盟同士で実施してほしいというのが希望です。

牛木：これまで話を聞いてきて、協会は堅いですから、プレイしているのならちゃんと登録しろと言ってくるわけです。だけど、8月の月例会で報告があった豊田の場合は、人工芝でやっているし、女の子が得点した場合は2点等、正式でないルールでやっているわけですね。そして徳田さんの場合は、

協会同士ではなく海外交流をやっているということで、将来的に協会との関係で、協会のなかで頭の固いのが出てきて、今のところフットサルは大目に見ようという方針で来ているのだけれども、今後協会との関係が問題になってくるのではないかと思いました。協会側は我々の年寄りのサッカーに対して3年ぐらいすると、ちゃんと登録してくださいと言ってきて、ついに今年度から70歳以上のリーグは東京都協会が主催すると言って、登録するように通達してきましたが、現状4チームしか登録していません。他のチームは登録費を払ってプレイするまではないと言っています。東京都協会の大会で、ひとり結婚指輪をしていた選手がいてもう70歳ですから指輪が食い込んでいるわけです。いままではテープを巻けば良かったのですが、FIFAのルールが変わって指輪を外せということになりました。外れなかったのが彼は試合に出れませんでした。そんなアホな協会の頭の固さがあるので、将来問題になりかねないと心配になりました。

中塚：おそらく日本協会の中心にいる人たちはもっと柔軟なんだろうと思いますが、ルールが末端に降りてきた時に、「これは協会の仕事なんだ」ということで、末端の人が急に真面目になるんですね。まったく同じことが、我々がやっているDUOリーグでも起きています。ユースリーグがローカルなプライベートリーグだった頃は、特別枠選手制度でオーバーエイジ枠を利用できたのですが、底辺から頂点までリーグ構造が整備されてきて、昇降格があるとすると、真面目な学校の先生たちが、徐々にゆるやかな“遊び心”を嫌がるようになってきています。変な話ですよ。

それでは、最後に山下さんから、今日の感想等頂いて終わりにしたいと思います。

山下：本日はありがとうございました。第1回大会が終わったところで、まだまだこれから色々と準備をしなければいけないのですか、もう少し拡大できればいいなと思っていますのでご協力します。どうもありがとうございました。

以上（続きは「ルン」で）